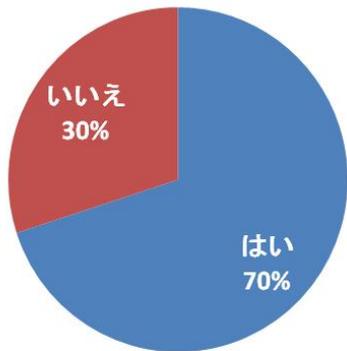


## ■集計結果

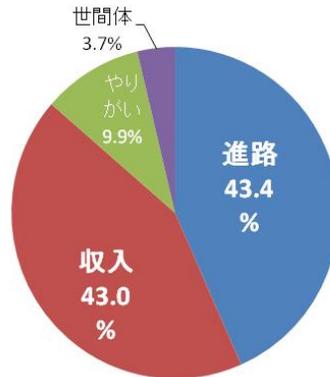
### ①「現役後」の意識について

【設問】 現役引退後の生活に、不安を持っていますか？ 不安があるとすれば、どれはどのような点ですか？

【図1】不安の有無



【図2】不安の要素

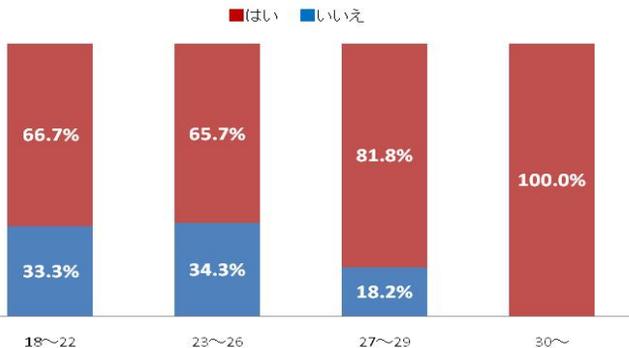


70%の選手が、引退後の生活に対して不安を感じている。【図1】  
この数値は、この4年で75.8%→76%→74%→72%と若干ではあるが低下している。

「不安がある」と答えた選手に、不安を感じる理由を聞いてみた（複数選択）。  
「生活していけるか」といった収入面での不安と、「引退後、何をやっていけばいいのかわからない」といった進路面での不安を挙げる人で、あわせて86.4%。【図2】

毎回、生活していく上で必要な「収入」よりも、「進路」が不安要素の上位にくる。  
セカンドキャリア支援の現場で必ず選手が口にする「これまで野球しかやったことがない」に起因する不安の表出といえる。

【図3】年代別不安有無

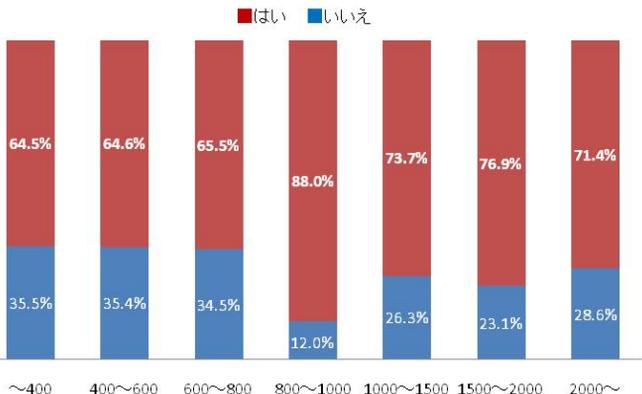


世代別で引退後の不安有無を聞いてみたところ、年齢が上がるに従って「不安」と答える人が増えており、30代（10名）については、全員が「不安」と答えている。【図3】

プロ野球選手の引退時平均年齢が29才であることを考えると、30代以上の選手が何かしらの不安を感じるのも当然といえる。

加齢ではなく、年収との関係性を見てみたところ、高い年俵が不安を払しょくするというものでもないらしい。

【図4】年俵別不安有無



「不安」と答えた比率が最も高かったのが、年俵800～1000万円のゾーン（88%）。年俵が2000万円以上でも、71.4%の選手が「不安」と答えており、平均よりも高い。

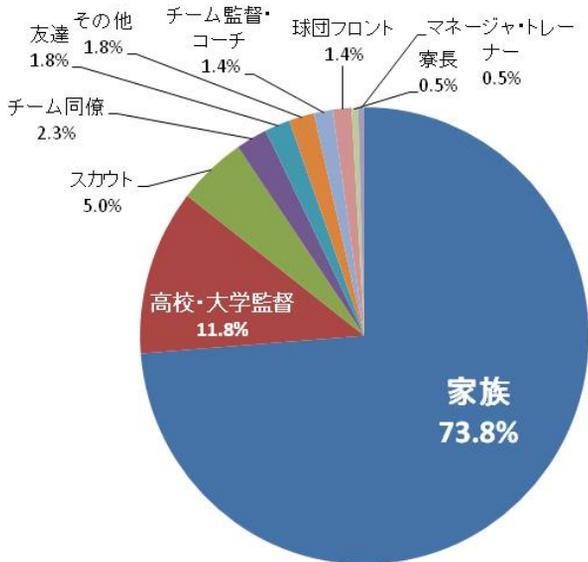
一方、最も「不安」と答えた比率が低いのが、年俵400万円以下のゾーン（64.5%）。

このゾーンは育成選手が多く含まれていると思われる。不安を感じる以前に、期待に満ち満ちている秋季キャンプ、といえるかもしれない。

## ②相談相手について

【設問】あなたが「戦力外通告」を受けたとします。自分の進路についてあなたが最初に相談する相手は誰ですか？

【図5】最初に相談する相手は？



こうした不安を感じている選手たちが自身の引退を最初に相談するのは誰か。

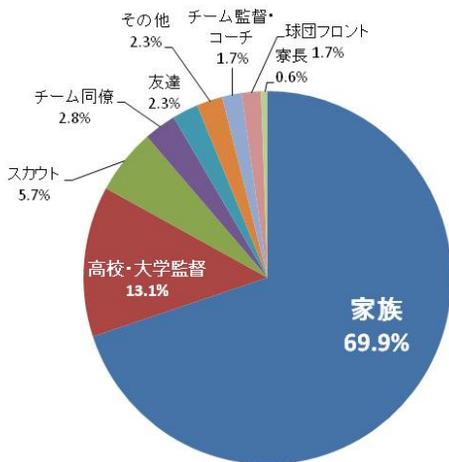
圧倒的に多かったのが「家族」で73.8%。高校・大学監督が11.8%と続く。【図5】

これを既婚者・独身別で見ると、既婚者は「家族」を挙げる比率が90%近い。独身者でも、約70%と高い比率を占める。

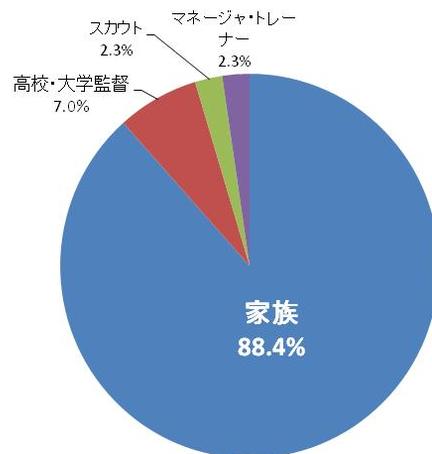
一方、チームの監督やコーチといった、日頃グラウンドで接している人たちに相談する、という比率は1.4%と低かった。

既婚・独身を問わず2位につけたのが「高校・大学の監督」。  
再就職先を紹介された、といった話もよく耳にする。卒業後も絆は深そうだ。

【図6】最初に相談する相手～独身者の場合



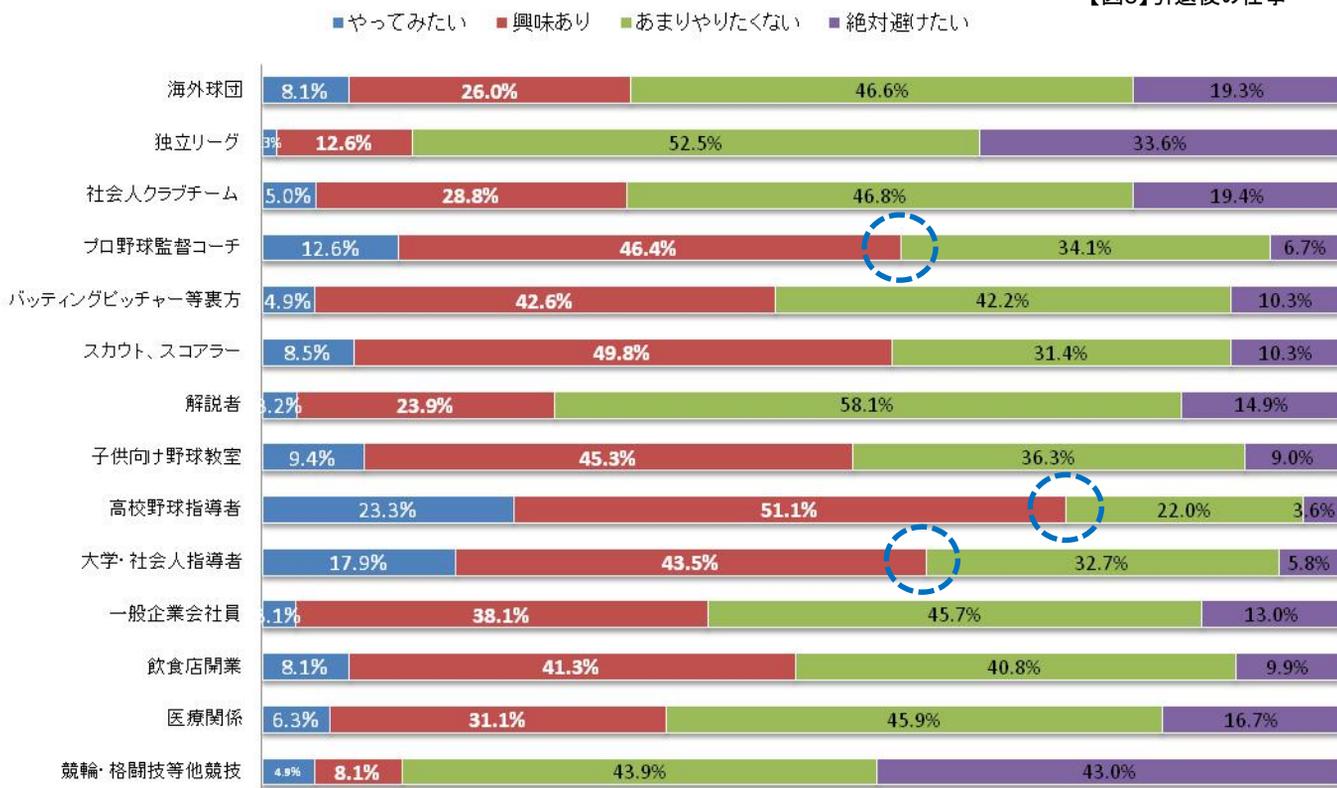
【図7】最初に相談する相手～既婚者の場合



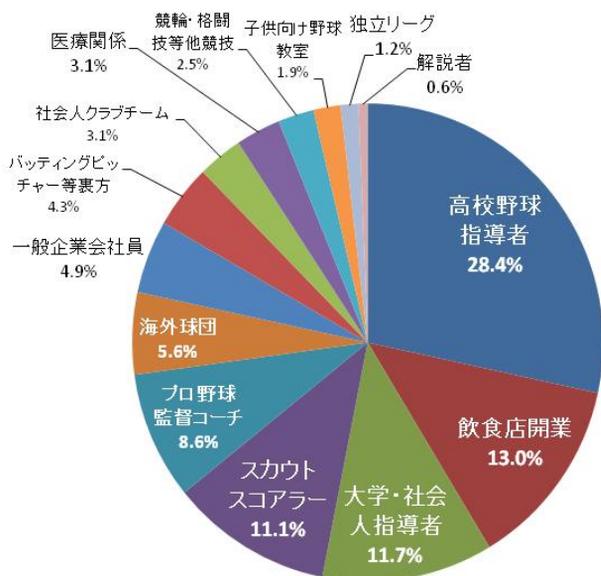
### ③引退後の職業意識について

【設問】プロ野球選手を引退した後、どのような仕事をしてみたいと思いますか？ それぞれの仕事に対して、当てはまる気持ちに○をつけてください。

【図8】引退後の仕事



【図9】引退後、一番やってみたい仕事



前回と同様に、高校野球、大学・社会人野球指導者の人気が高い。プレイヤーとして培ってきた経験を指導者として次代に引き継ぎたいという選手の皆さんの思いは、変わらなさそうである。

また、「他競技」や「独立リーグ」は、こちらも変わらず人気が低い。

「一番やってみたい仕事は何か」という設問に対しても、高校野球指導者がトップ。【図9】

前回、3位だった「飲食店開業」が2位に浮上し、プロ野球監督コーチが10ポイント近く下げて2位から5位に後退した。

後退の理由は定かではないが、選手から見た時に「監督業は苦労ばかりで報われない」と思わせる何かが、今年度は多かったのかもしれない。

フリーコメントでは、「介護士」「学者」「社長」「農業」「トレーニングコーチ」「不動産屋」「プロ雀士」など。

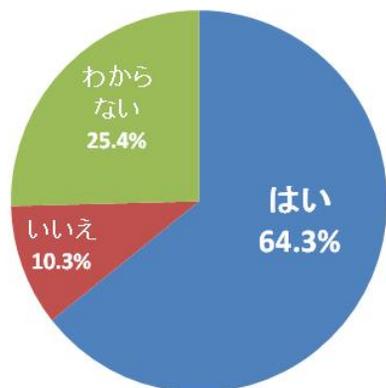
中には、「現役続行」というコメントも。恐らくこれが、選手にとっての本音なのだろう。

#### ④「貯蓄」について

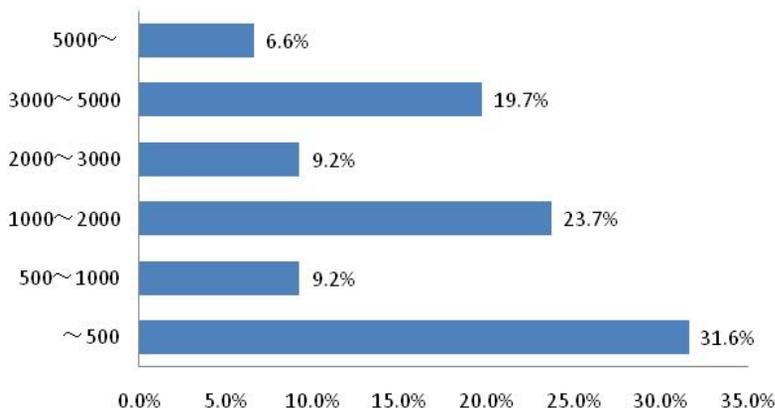
【設問】あなたには今、貯蓄がありますか？（貯蓄とは：現金、銀行預金や財形、株、退団金共済など）→【図10】

【設問】「はい」とお答えになった方にお聞きします。貯蓄額は、いくらくらいですか？ →【図11】

【図10】



【図11】



「貯蓄があるか？」といったシンプルな質問に対し、64.3%が「はい」と答えている（前回は71%）。また、25.4%が「わからない」と答えている（前回は19%）。

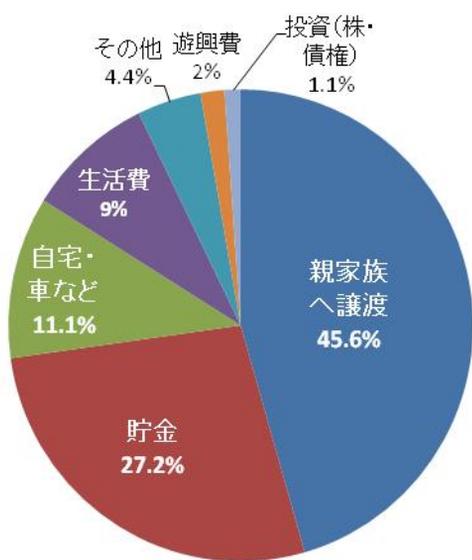
1000万円以上の貯蓄がある選手が、貯蓄ありと答えた人のうち、60%を占める。平均年齢23才、つまり大卒1年目に相当する若者の貯蓄額としては、多いといつてよいだろう。

一方、貯蓄の有無が「わからない」人たちが、4人に1人いるこの現状をどう見るか。引退時平均年齢が29才。プロ野球選手として収入を得られる期間がさほど長くはないことを考えると、もう少し金銭に対する当事者意識があってもよいように思う。

若い選手の貯蓄の源泉として想定されるのが、年俵と契約金。契約金は、「なし」から「1億円」まで様々だが、その用途について聞いてみた。【図12・図13】

親・家族への譲渡が45.6%と高く、貯金がそれに続く。契約金1000万円以下に区切って集計しても、1位は親・家族への譲渡。日々の生活費が僅差で続く。

【図12】契約金の使い道



「契約金は退職金の前払い」といった発想が球界には根強い。だとするならば、譲渡を受けた親が、子が変わってしっかり管理する責務を追うべき、といった考え方も成り立つように思われる。

【図13】契約金の使い道（契約金1000万円以下）

